

〔行事報告〕

「流体若手夏の学校 2002 —力学系としての流体力学—」の報告

*東大・院・数理科学研究科 齊木吉隆[†]

去る 2002 年 9 月 9 日 (月) から 12 日 (木) において 3 泊 4 日で日本流体力学会後援の「流体若手夏の学校 2002 —力学系としての流体力学—」が開催されました。本企画「流体若手夏の学校」は、毎年夏に大学院修士課程、博士課程の学生から PD、助手を中心とした 20 名から 30 名の流体力学に関心を持つ若手研究者が全国各地から合宿形式で、一ヶ所に集まって行なわれます。そこでは、最先端で研究されている先生をお招きして講義をして頂く一方、若手研究者同士で交流を深めながら、活発な研究発表、議論を朝から晩まで行なうということで、同世代で情報交換を行ない、かつ刺激を与え合う機会をもつという重要な役割を果たしています。

本年度は、東京大学大学院数理科学研究科が幹事校となり、講師として、向川均先生 (京大・防災研究所)、河原源太先生 (京大・院・工) をお招きし、神奈川県箱根芦ノ湯温泉の旅館きのくににて、—力学系としての流体力学—を副題とした夏の学校を開催致しました。参加者は、助手：4 名、PD：2 名、D3：1 名、D2：2 名、D1：3 名、M2：5 名、M1：3 名、研究生：1 名の延べ 21 名で専門も乱流、波動、気象、地球流体の他、非線形力学、非平衡物理、非線形経済動力学と広範囲に渡っている方々に御参加頂きました。

スケジュールは、大きく講義と若手研究発表の 2 つに分けられます。具体的には、2 日目午後 4 時間半に渡り、向川先生に「力学系理論を援用した対流圏季節内長周期変動の力学と予測可能性

に関する研究」と題して、天候レジームに関する観測的研究の紹介の後、非線形力学系理論の観点から、先生自身のご研究を中心に天候レジームの力学についての解説をして頂きました。また、3 日目午後は、4 時間半に渡り、河原先生に「乱流中の秩序構造をどう捉えるか」と題して、運動量やエネルギーの輸送、乱れの再生・維持、そして間欠性の発現などに深く関与するものと考えられている乱流中の秩序構造をいかにして捉え得るかということに焦点をあて、先生自身が研究されているナビエーストークス方程式の周期解や平衡解による時空間秩序記述の試みなどを解説して頂きました。以上のように気象、乱流という流体力学でも若干視点の異なる分野での最先端の力学系としての取り扱いを御紹介頂きましたが、両講義とも、多数の質問やコメントも出され、活発な講義となり、多くの参加者からも勉強になったとの感想を頂戴しました。

一方、初日、2 日目午前、3 日目午前、4 日目は、若手研究発表として、1 人あたり 30 分から 1 時間半程度で各自の研究内容を発表して、積極的な討論が繰り返されました。また、夜も各人がポスター等研究結果を持参して、深夜まで議論が行なわれました。この様に本年度の夏の学校も非常に盛況に終ることができました。最後になりますが、講師を快く引き受けて下さった向川先生、河原先生、および会を盛り上げて下さった参加者皆様に感謝申し上げます。

なお、来年度も行なわれる予定になっておりますので、これをお読みになり興味を持たれた方は、是非お気軽に御参加ください。

* 〒153-8914 目黒区駒場 3-8-1

† E-mail: saiki@ms.u-tokyo.ac.jp